

岡山県大学図書館協議会平成 26 年度研修会報告書

1. 開催日時：平成 26 年 11 月 11 日（火）13:00～16:30
2. 場 所：岡山大学附属図書館中央図書館 本館 3 階 セミナー室
3. 参 加 者：県内 14 大学・短大・高専 19 名
4. 司 会：荻崎 直子（中国学園大学図書館）
5. 書 記：長江 真理子（川崎医療福祉大学附属図書館）
岸本 京子（就実大学図書館）
6. テ ー マ：図書館の広報戦略 ―図書館にとって効果的な広報とは―

(1) 開会

岡山大学附属図書館 事務部長 山田周治氏より開会挨拶がなされた。

(2) 講演：「大学図書館の広報活動―館報を中心として―」

講師：西川 英治氏（広島経済大学図書館 部長）

「自分は広報の専門家ではない」と前置きをされたうえで、西川氏が作成された配付資料をもとに、ご講演をいただいた。

0. はじめに（自己紹介）

広島生まれの広島育ち。現在お勤めの広島経済大学をご卒業され、丸善株式会社広島支店へ入社された。34 歳のとき、母校の広島経済大学から図書館へ就職の話があり、転職され、司書資格を取得。63 歳である現在まで図書館に勤務されている。

1. 広報とは

広報とは、「官公庁・企業・各種団体などが、施策や業務内容を広く一般の人に知らせること」である。英語で「PR (Public Relations)」を示し、直訳すると「公衆との良い関係づくり」である。

広報は一方的であってはならない。発信する側と受信する側の双方向コミュニケーションが大切である。

広報という概念が日本にもたらされたのは戦後のことである。最初は行政を対象として広報活動が始まった。時代の変化とともに、広報の内容や対象、役割が変化し多様化していった。

2. 大学図書館の広報

おそらく、昔の大学図書館は、広報の重要性を意識しなかっただろう。学生は、自分で勉強をするために大学へ来て、自ら図書館へ足を運び調べ物をしていた。教員も、自分の研究に必要な文献を求めて図書館を利用していた。利用者が必要とするものにこたえることで図書館は役割を果たし、利用者によって図書館は鍛えられていた。

現在は、昔のような学習意欲を持つ学生が減り、インターネットの普及もあり、わざわざ図書館へ行かなくても情報が手に入るようになった。

広島経済大学では、かつて図書館利用者カードを作成したが、在学生のうち 3 分の 1 が受け取りに来なかった。つまり、3 分の 1 の学生にとって、図書館は必

要のないところだった。

現在は、図書館の利用向上や、図書館の役割と利用方法を知らせるために広報することが重要視されている。

広報の手段としては、利用案内・館報・要覧・ホームページ・ブログ・フェイスブックなどが挙げられる。

3. 図書館報について

図書館報とは、図書館を PR する手段となる広報物の 1 つ。図書館の規模や配付対象、目的によって多種多様である。

伝統的な館報は「タイトルが筆書き」「一面に館長のことば」「文字だらけ」「余白に草花などの挿絵が施されている」、まさに広島経済大学がかつて刊行していた図書館報がこれであった。

図書館報を作るうえで重要なことは、次の 2 つである。1 つめは、発行目的をはっきりとさせること。誰に、何の目的で発行するのか。2 つめは、必要な情報ならだれでも読むはずだという図書館員にありがちな思い込みを捨てること、である。

広島経済大学がかつて作っていた館報「山の上」は、読者層を定めておらず、2 つめの「必要なら誰でも読む」という思い込みで作っていた。

4. 広島経済大学図書館の館報

1991 年 4 月に館報「山の上」が創刊。年 2 回の刊行であった。

刊行の動機は、館報くらい出したいという軽い気持ちがきっかけ。ちょうどその時に新聞社をリタイアして勤務している職員がいたため、その人を編集長として館報作りに取りかかった。キャッチフレーズは「利用者と図書館の架け橋」。先に挙げたとおり、筆書きのタイトル、館長のことばで始まり、文字がぎっしりと埋められた“伝統的な館報”であった。

「山の上」という館報名に決まったのは、当時の広島経済大学の所在地に“山の上”という地名があったため。

広島経済大学図書館では、館報は職員が学生へ手渡しをしている。学生が乗り降りするバス停の近くで待機して、学生に受け取ってもらう。

2005 年春からカラー印刷。

2008 年春（第 35 号）で廃刊となった。刊行から係長クラスの職員が編集長を務めていたが、担当する職員がいなくなった。

5. “JavaLa” の刊行

若手職員を編集委員に指名し自由に作らせたところ、「山の上」とは 180 度違う館報が出来上がった。対象を学生に特化し、読者の絞り込みを行った。

予算は「山の上」と同じ金額しか使えないので、その予算内に収めるために考えた末、独特な形態の JavaLa（ジャバラ）が出来上がった。

編集委員の要望により、創刊号と 2 号は、JavaLa に飴玉を付けて学生へ配った。そこまでしても、学生に JavaLa を受け取ってほしかったという。

キャッチフレーズは「あなたと図書館をもっと身近にしたい」

表紙は広島経済大学の学生で、写真部の学生が撮影をしている。

編集委員が「ジャバラーズ」になって、いろいろな実験や経験を行っている。作り手が楽しむ姿勢が感じられる。

ただし、この **JavaLa** もいつまで続くかはわからない。前回（「山の上」）のように、作者がいなくなればそこで終わる時が来るかもしれない。

6. おわりに（質疑応答）

Q. 館報の配付方法は？（西川氏より館報を発行している大学へ向けて）

A. 成績表など大学からの送付物と一緒に家庭へ郵送している。あとは大学行事の際に配付したり、図書館内で自由に持ち帰ってもらったりしている。（就実大学）

A. 図書館に関係する教員へは学内便で配付するが、学生への個別配付は行っていない。（岡山大学）

Q. **JavaLa** の表紙のモデルを選ぶ基準は？（就実大学）

A. 編集委員が選んでいる。図書館に来る学生に声をかけて、面接をして許諾をもらう。

Q. ターゲットを学生に絞っているが、企画や編集に学生を加えることを考えているか？（岡山大学）

A. 学生は加わっていない。

Q. **JavaLa** にリニューアルして、学生が読んでいると思うか？（岡山大学）

A. 編集委員は読んでいると言っている。前の「山の上」のように、ゴミ箱に捨てられることがなくなったと。

Q. 館報をやめようという話になったとき、代わりにブログやフェイスブックを始めようという話はないのか？（新見公立大学）

A. 別のものを始める話はない。紙媒体でいくかインターネットにするかという議論ではなく、やるかやらないかという話しかしていない。

Q. **JavaLa** 以外に作成しているものがあるか？（就実大学）

A. 図書館のイベントを告知する際はポスターやチラシを作っている。

Q. **JavaLa** にある「教えて西川さん」のコーナーについて、どのように選書をされて

いるのか知りたい。また、掲載頁下部にある「知の系譜」について、どのような内容なのか教えてほしい。（ノートルダム清心女子大学）

A. このコーナーで本を選ぶのは編集委員である。知の系譜文庫の公開は、もともとは非公開であったが、要望により公開している。オープンキャンパスでの公開もおこなっている。

(3) グループ討議

グループ A・B・C・D の 4 グループ（1 グループ 4 人）に分かれ、以下の要領で討議を行った。討議中、講師の西川氏に各グループへ回っていただいた。

<グループ共通のテーマ>

自館が取り扱う広報とこれから取り入れたい広報

<進行順序>

- ①グループ内での担当（発表者・書記・タイムキーパー）をくじ引きで決める。
- ②1人1分で自己紹介する。
- ③共通のテーマを基に、グループごとに与えられたキーワードについて討議する。
- ④討議した内容をまとめて画用紙に記入する。
- ⑤グループごとに、発表担当者がまとめた内容を発表する。

各グループの発表内容は、以下の通りである。

1) グループ A のキーワード：「大学」

○「大学」からの発信

受験生や地域の人々に、図書館から大学の魅力を発信する。

○今行っている広報

- ・大学学術発信としての図書館・・・地域の人々やこれから大学を受験しようとする人々へ、大学を知ってもらうためのきっかけ作りを行う。ホームページへの掲載、チラシ配布等で広報を行っている（県立図書館や公民館等）。この先も継続して発信していきたい。
- ・大学教員が講師となるセミナーを開催する。

○これから追加で行いたい広報

- ・ホームページ、チラシ等の広報・・・JavaLa（広島経済大学図書館館報）のような、学生が興味を持つようなインパクトのあるものを作成する。
- ・オリジナルグッズの作成・・・大学や図書館のオリジナルグッズを作成し、それを図書館で活用することで、大学や図書館を思い出してもらうきっかけを作る。
- ・マスコミの活用・・・新聞社やテレビ局等を呼び、図書館で開催されるセミナー等についての広報を通して、大学のことも知ってもらう。

2) グループ B のキーワード：「学生」

○現在行っている広報（イベント等も含める）

- ・ブックハンティング・・・書店に行き、実際に手にとって図書を選ぶ。
- ・図書館報を作成する。
- ・図書館オリエンテーションを開催する。
- ・図書館ホームページへの掲載、Twitter を活用する。
- ・ポスターコンクール・・・図書館でテーマを設定して学生がポスターを応募する。
- ・ポップコンテスト・・・書店等に置いてあるポップ（本の紹介）を学生が応募する。
- ・ベストリーダー賞・・・よく本を読んでいる学生を表彰する。
- ・ビブリオバトルの参加・・・津山市の図書館で開催しているビブリオバトルへ、学生の図書委員が参加している。
- ・情報検索講習会、オープンキャンパスで図書館の PR を行う。

○これから取り入れたい広報

- ・図書館報を作成する。
- ・Twitter、LINE を活用する。
- ・ポスターコンクール、ポップコンテスト、ビブリオバトル等のイベントをうまく活用する。
- ・オープンキャンパス・・・図書館員や職員が説明するだけでなく、学生と一緒に

広報を行う。

- ・ブックハンティングを開催する。

○問題点・まとめ

- ・ブックハンティング等のイベントに期待するほど学生が集まらない。
- ・現在行っている広報が、実際に学生にどこまで伝わっているか分からない。
また、学生の興味が図書館に伝わってこない。
- ・学生の声を取り入れた企画を行うことが重要ではないか。
- ・学生主体の企画・・・イベントの企画も学生が行うことが一番理想ではないか。

3) グループ C のキーワード：「地域」

○各大学で地域に向けて行っている広報・現状

- ・公開講座の開催・・・ホームページへの掲載、チラシ・ポスターを配布する（公民館、高校）。かつ、広報誌、新聞への告知記事を出す。
- ・高校生にオープンライブラリーとして、図書館の場所の提供・・・初年度と 2.3 年はポスターを作成・配布し、その後は全て口コミ（SNS、Twitter 含む）で広まり、高校生の利用が増えている。

○問題点

- ・公開講座・・・チラシ・ポスターを配布しても見てもらえない。
- ・広報誌、記事・・・費用対効果が薄い。
- ・高校生へのオープンライブラリー・・・高校生の利用者が増えたことにより、大学の学生が図書館を使えない等の広報による弊害・影響が出てきている。需要と供給の問題が発生している。

○今後の広報

- ・ターゲットをしぼる・・・チラシ、ポスター作成・配布等様々な取り組みをしても、思ったような効果が上がらない。ターゲットによって広報媒体や方法を変えてみてはどうか。

具体例) ホームページへ、地域へ向けたバナーを作成する。また、リピーターを増やすために双方向コミュニケーション時に古典的なやり方（TEL 等）も効果があるのではないか。

4) グループ D のキーワード：「教員」

○各大学で現在行っている図書館の広報

- ・Web 掲示版・・・学内者限定で教員を特定して配信することが可能である。
図書館ホームページ・・・一般の方を含め、学内外へ向けて広くお知らせが可能である。
- ・新人教員ガイダンス・・・その年の新人教員へ向けて、図書館利用について説明を行うというチラシを配布する。希望者は図書館に来館していただき、図書館員が見学ツアー等を行う。
- ・図書館委員会・・・各学科の教員から図書委員が選出され、定期的に委員会を開催し、そこで図書館からのお知らせをする。また、運営についての協議等を行う。

○問題点

- ・Web 掲示版、図書館ホームページ・・・教員、学内以外の方がどれくらい見ているのか、実感がつかみにくい。
- ・新人教員ガイダンス・・・申込が少ない。図書館に来館する教員が限定、特定されている。

○これから取り入れたい広報

- ・教員を巻き込んだ企画展示・・・ゼミや研究室単位で学生と教員が協力し、研究分野のテーマ展示を図書館というスペースを使って展示する。その様子を写真に収め、後日図書館ホームページにアップすることで、教員や学生に見てもらおうという効果が期待できる。
- ・図書館報の作成・・・魅力ある図書館報にするために、教員からの図書の紹介、教員と図書館との協働した企画の頁を設けるなどして、教員の興味を引くような図書館報にして広報につなげる。
- ・図書館ホームページに教員専用サイトの作成・・・教員専用サイトの頁を利用して、予算の執行具合を定期的にお知らせする。

—質疑応答—

- Q. B グループのこれから取り入れたい広報の中に LINE という箇所があり、○印して強調していた。自分が LINE を使用していないのでよく分からないが、LINE は仲間内でのやり取りというイメージがある。どのように使うという話で出てきたのか、教えてほしい。
- A. LINE は仲間内だけで使用するということもするが、商業施設のアカウントのようなものを作っており、自分が興味のあるアカウントを取得すると、そこから情報が流れる。メールは通知が来るとうとうしいと思うこともあるが、LINE は通知 OFF という設定もあるので、自分が見たい時にたまった情報を見ることが出来る。大学や図書館がアカウントを作り、そのアカウントを学生が取得してくれば、定期的に情報を配信しておくことで、情報が広報として出来るのではないかと考えた。将来的に LINE が出来ればという話が出たので、LINE の箇所を強調して○印をした。

—講評—

グループ討議は、徐々に内容が活発になっていた。自分たちで広報について様々な議論をし、一定の方向性まで話が出来ていて素晴らしかった。広報の難しいところは、情報を流してもそれを計ることが出来ないことである。業務の結果などはアンケート等ですぐ結果が出るが、広報は効果が出ているのかということの評価が非常に難しい。じっくり後で利用の状態を見る等しなければならない。広報とは、焦らず力まずに、何を誰に伝えたいのかをきちんとしておけば、相手に伝わるのではないだろうか。現場の方々にこのような話をする機会が今までなかったが、今日は自分自身も大変勉強になり有難かった。本日の研修会は非常に活発で、皆さん大変素晴らしかった。

(4) 閉会

司会者 栗崎直子氏（研修委員長）より、閉会の挨拶があった。

(5) 岡山大学附属図書館見学

岡山大学附属図書館職員の案内により、本年度 5 月にリニューアルオープンした中央図書館の見学を、希望者のみ行った。その後自由見学。

以上